



TITLE:

睡虎地秦墓竹簡の屬邦律をめぐって

AUTHOR(S):

工藤, 元男

---

CITATION:

工藤, 元男. 睡虎地秦墓竹簡の屬邦律をめぐって. 東洋史研究 1984, 43(1): 60-87

ISSUE DATE:

1984-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153937>

RIGHT:

# 睡虎地秦墓竹簡の屬邦律をめぐって

工藤元男

まえがき

一 秦の屬邦と道

二 前漢にみられる屬國の形成

三 後漢にみられる屬國と道

四 秦簡の屬邦と臣邦眞戎君長

むすび

まえがき

さきにわたしは、近時出土の睡虎地秦墓竹簡（以下秦簡と略す）を主な史料として、戰國秦における耕戰制度下の縣の性格を内史との關聯で考察し、<sup>(1)</sup> ついで春秋以來の舊邑や戰國中期の商鞅變法の軍功褒賞制によって封建された列侯の封邑を、中央政府が都官の制を布くことによって郡縣制のなかへとりこんでいった過程を論證した。<sup>(2)</sup>

ところで秦は、春秋時代の繆公のとき周邊の異民族を制壓して「西戎に霸たり」<sup>(3)</sup>と稱され、その戰國時代の惠文王のとき有名な巴蜀經略をおこない、その開發と經營によってもたらされた豊かな富が、六國統一に大きく寄與したといわれている。そのけっか秦は多くの異民族を内部に抱えこむことになったと思われる。とすると、それらの異民族をどのよう

に治めてゆくかが重要な政治課題であつたに相違ないが、それに關する史料は少なく、實態はほとんど空白であつたといわざるをえない。

しかし幸いに秦簡のなかに屬邦律という異民族居住區に關する律文がみえるので、これを手がかりとして、わたしは秦の異民族支配の構造を検討してみたいと思う。

## 一 秦の屬邦と道

問題の屬邦律は

道官の隸臣妾・收人を相輸すには、必ずその已に稟せし年月日、衣を受けしか未だ受けざるか、妻有りや有る毋しや、を署せ。受けし者には律を以て續けて之を食衣せしめよ。 屬邦<sup>(5)</sup>

のごとくである。では、このような律が適用される屬邦とはいかなるものであるうか。またこの文中にみえる道官の道について釋文注釋者は「少數民族の集居している縣」と注しているが、はたしてそれでいいのであろうか。

まず屬邦についてみるに、その名は「呂不韋戈」・「呂不韋詔事戈」・「呂不韋戟」等々と呼ばれている戰國秦の金文史料のなかにみえる。その器銘の拓片は、劉心源『奇觚室吉金文述』(一〇・二九・鄭安『周金文存』(六・二)・陳介祺『簠齋吉金錄』(四・一二)・劉體智『善齋吉金錄』(古兵上三七)・同『小校經閣金文拓本』(一〇・五九・一)・羅振玉『三代吉金文存』(二〇・二八・二)・同『秦金石刻辭』(上)・郭沫若『金文續攷』(二・四二)・同『金文叢攷』(四一九)・容庚『秦金文錄』(二二)等々に著録されている。劉心源の釋文によると、その銘文は次のごとくである。

(正面) 五年相邦呂不韋造

詔吏圖丞戴工寅

(背面) 泅嬰

## (又刻) 屬邦

この戈(以下「五年戈」と假稱)の出土状況は定かでないが、一九七六年八月六日、陝西省三原縣附近からこれと酷似した銘文をもつ戈が出土した。<sup>(6)</sup>報告者の李仲操氏によると、その銘文は次のごとくである。

## (正面) 八年相邦呂

不韋造詔事

圖丞叢工爽

## (背面) 𠙴𠙴

## (又刻) 屬邦

この新出土の戈は「五年戈」の信憑性を決定すると同時に、戦國末の秦に屬邦が實在したことを裏附けるものである。

「五年戈」にみえる屬邦に關して、劉心源は

漢初、秦制を承けて相國を置く。而るに此の戈は相邦と傳す。漢に典屬國有り。而るに此の戈は屬邦と傳す。蓋し高祖の諱を避け改め、後に遂に國を用いて邦を用いざりしならん。

と説明している。そこで『漢書』卷一九百官公卿表(以下、百官表と略す)の典屬國の條をみてみると、

典屬國は、秦官、蠻夷の降者を掌る。武帝の元狩三年、昆邪王の降るとき、復た屬國を増し、都尉・丞・候・千人を置く。屬官に九譯令あり。成帝の河平元年、省きて、大鴻臚に并す。

とあり、秦では投降してきた異民族を屬國に居住させ、それを中央の典屬國に掌らせたという。もしそうであるならば、秦では正確には典屬邦と呼ばれていたと推定される。

秦代の屬邦・典屬邦に關する史料は、管見のかぎりではこれだけである。

ついで道についてみるに、同じく百官表に

列侯の食む所の縣を國と曰い、皇太后・皇后・公主の食む所を邑と曰い、蠻夷有るを道と曰う。

とあり、異民族の居住している縣のことであると説明している。さきの釋文注釋者の注もこれに従ったものであろう。このほか衛宏の『漢舊儀』<sup>(8)</sup>卷下に

内郡を縣と爲し、三邊を道と爲し、皇后・太子・公主の食む所を邑と爲す。

とある。この三邊とは何のことであろうか。『史記』卷二五律書に

高祖、天下を有ち、三邊、外に畔す。<sup>(下略)</sup>

とあり、『史記會注考證』所引の沈家本は、省略した部分の下文を検討して、この三邊とは南の南越・北の匈奴・東の朝鮮のことであると解している。これにたいして『後漢書』卷八靈帝紀・熹平六年の條に

鮮卑、三邊に寇す。

とあり、これに李賢は

東・西と北邊とを謂うなり。

と注し、胡三省も『通鑑』において同條に

鮮卑強盛にして、東・西・北の三邊は皆寇を被る。

と注している。この李・胡二注は漢帝國の東・西・北邊を三邊と解するものである。

三邊を南越・匈奴・朝鮮と解する沈説、および漢帝國の東・西・北邊と解する李・胡説は、各本文に即した解釋としてはいづれも妥當と思われるが、『漢舊儀』の三邊は必ずしもそれにあてはまらない。『漢舊儀』では内郡と縣、三邊と道とがそれぞれ對比して表されているので、衛宏は三邊を邊郡の意に使用していると解される。このような用例は『續漢書』百官志(以下、百官志と略す)所引の應劭の『漢官(儀)』<sup>(9)</sup>においても認められるので、それを百官表の道の文と重ねてみると、邊郡の縣を道と稱し、そこは異民族の特別行政区であったことがわかる。

道名	地理志 所屬郡名	郡國志 所屬郡名
道	左馮翊	南郡
夷道	南郡	南郡
營道	零陵郡	零陵郡
冷道	零陵郡	零陵郡
旬氏道	廣漢郡	廣漢屬國
剛氏道	廣漢郡	廣漢屬國
陰平道	蜀郡	蜀郡屬國
嚴道	蜀郡	蜀郡
湍氏道	犍爲郡	犍爲郡
犍道	犍爲郡	犍爲郡
靈關道	越巂郡	越巂郡
故道	武都郡	武都郡
平樂道	武都郡	武都郡
嘉陵道	武都郡	武都郡
循成道	武都郡	武都郡
下辨道	武都郡	武都郡
狄道	隴西郡	隴西郡
氏道	隴西郡	隴西郡
予道	武都郡	武都郡
羌道	武都郡	武都郡
戎邑道	天水郡	天水郡
縣諸道	漢陽郡	漢陽郡
略陽道	漢陽郡	漢陽郡
獮道	漢陽郡	漢陽郡

表1 「地理志」にみえる道。久村氏作表。ただし一部改める。

この道制の開始について、酈道元・杜佑・樂史・胡三省らは漢制とし、司馬彪そして最近では嚴耕望・久村因兩氏が秦制とみなしておられる。とくに久村氏は、地理志のなから道字のつく縣名を三〇例検出し、それを『續漢書』郡國志（以下、郡國志と略す）と對應させ（表1）、さらに地理志以外からも五例検出し、それらの道の分布が大部分現在の陝西・甘肅・四川の三省に限定されていることなどから、道はそれらの地域を支配下に入れていた戰國時代の秦の制度であることを論證された。また道は、秦簡のなかで前引の屬邦律以外にも「語書」の冒頭に

（秦王政の）廿年四月丙戌朔丁亥、南郡守騰、縣・道の畜夫に謂ぐ……

とみえ、これによると道の長吏を道畜夫と稱したことがわかる。そしてこれを地理志に徴してみると、南郡の屬縣の一つに夷道の名がみえる。これらのことから、道制の開始は戰國秦に求めて間違いないと思われる。秦簡の出土後、駢字鸞氏もそのように認めておられる。

これまでの検討によつて、屬邦も道も秦代に存在し、そのいづれも異民族の特別居住區であることが明らかになった。すると、この兩者はどのような關係になっていたのであろうか。しかし秦代における屬邦と道の關係を直接検討するには史料上の限界がある。そこで多少迂遠なようではあるが、比較的史料の豊富な漢代の場合をまず検討することによって、秦代への手がかりを掴みたいと思う。

## 二 前漢にみられる屬國の形成

前漢の屬國については『漢書』卷四八賈誼傳所載のかれの上疏文に、

月氏道	安定郡
除道	北地郡
略畔道	と
義渠道	と
雕陰道	上郡
連道	長沙郡
	上郡
	長沙郡

この官についた者の名が始めてみえるのは、『史記』卷一〇孝文本紀の後七年の條の、文帝の遺詔のなかにおいてである。それによると、

中尉亞夫をして車騎將軍と爲り、屬國悍をして將屯將軍と爲り、郎中令武をして復土將軍と爲らしめよ。とあり、この屬國悍の屬國について『集解』は百官表の典屬國を注引し、また悍について『考證』は同書卷二二漢興以來將相名臣年表にみえる松茲侯徐厲の子悍と指摘している。いづれも是とすべきであろう。

この徐悍を筆頭にそのご典屬國についた者を『史記』・『漢書』のなかから搜してみると、次の景帝のときの公孫昆邪、昭帝から宣帝のときにかけての蘇武、宣帝のときの楊譚、宣帝から元帝のときにかけての常惠、元帝のときの馮奉世等々の名をみつけることができる。

では、かれらが掌った屬國にはどのようなものがあつたであろうか。『漢書』卷六武帝紀の元狩二年の條に

秋、匈奴の昆邪王、休屠王を殺し、其の眾を并將し四萬餘人を合せて來降す。五屬國を置き以て之に處らしむ。とあり、これによるとさきの百官表において投降してきた匈奴の昆邪王の率いる部族民は、五屬國に居住させられていたことがわかる。

この五屬國の位置について、杜佑は安定・上郡・天水・張掖・五原とし、徐天麟は地理志にその治所が記されている安定・上郡・天水・西河・五原屬國とし、張守節・胡三省は隴西・北地・上郡・朔方・雲中とし、周壽昌は安定・天水・上

……陛下は何ぞ試みに臣を以て屬國之官と爲し、以て匈奴を主らしめざらんや。とあるのがその初見である。この屬國之官を小竹武夫氏は屬國都尉と解しておられるが、それは誤りである。屬國都尉は武帝の元狩年間に置かれたもので、賈誼の事えた文帝の時代にはまだなかったからである。したがってそれは典屬國でなければならない。ただし賈誼の自薦にもかかわらず、かれが典屬國となつたことは史料にみえない。

郡・西河・五原としている。

この問題を専論された手塚隆義氏は、五屬國のうち朔方・五原・雲中・上郡の四つまで論定された。鎌田重雄氏はこの手塚説を再検討し、そのつか右の四屬國に、手塚氏自身は否定された張掖を復活させ、これを加えて五屬國とすべきことを論證されている。

次に問題となるのは、それらの屬國がいったいどのような性格のものであったか、ということである。手塚氏によるとこの五屬國の形成過程とその性格は次のようなものであった。すなわち、武帝のとき、とくに霍去病の活躍で河南の地は漢の領有に歸し、昆邪王の投降によって多數の匈奴人を抱えこむことになった。そこでかれらに自給させ、かつ他の匈奴の侵入にたいしてその防衛にあたらせるといいう一石二鳥の目的で五屬國が設けられた。この屬國はすでに高祖のときから置かれ、典屬國がこれを總括していたが、五屬國の設置を契機に屬國都尉が置かれ、投降胡人はその下に固有の組織を保ったまま集團生活をするようになった。以上の手塚氏の所論は鎌田氏によっても支持されている。

ところが、前漢ではこのような屬國の設置と併行して、邊境の異民族居住地帯にしばしば直接郡を開置している。例えば『史記』卷一一六西南夷列傳によると、武帝のとき、夜郎を中心に犍爲郡、且蘭・頭蘭等の地に牂牁郡、邛の地に越嶲郡、笮の地に沈黎郡、毋騶の地に汶山郡、白馬の地に武都郡が置かれ、また内屬してきた滇王の地に益州郡が置かれている。このような邊郡を地理志によってみてみると、そのほとんどが武帝の時代に集中している。武帝時代の盛んな對外進出を思えば、それは容易に領けるけれども、ではなぜ同じ武帝のときこのような使いわけがおこなわれていたのだろうか。この問題は右にあげた西南夷の居住地帯における邊郡の開置過程を検討することによって手がかりが得られると思われる。

例えば笮の地に開置された沈黎郡について、『後漢書』卷八六南蠻西南夷列傳に  
 笮都夷なる者は、武帝の開ける所にして、以て笮都縣と爲す。……元鼎六年、以て沈黎郡と爲す。天漢四年に至り、





の懷柔につとめ、或はその叛亂・侵寇を防禦するものであった」と説明しておられる。そしてこの部都尉による異民族支配の原型と推定されるのが、次の『史記』西南夷列傳の文なのである。

蜀人の司馬相如も亦言う「西夷の邛・笮には郡を置く可し」と。相如をして郎中將を以て往きて諭さしむ。皆南夷の如くす。爲に<sup>(37)</sup>一都尉・十餘縣を置き、蜀に屬す。<sup>(38)</sup>

これは武帝のとき唐蒙が南夷の夜郎の地に犍爲郡を開置したという漢の西南夷地方への進出を背景に、司馬相如が西夷の邛・笮の地に郡を開置すべきことを進言したものである。そのため武帝は元光二年（前133）ごろ相如を巴蜀へ遣わし、その遣使報告にもとづいて、その地に「一都尉・十餘縣」を置き、それを蜀郡に附屬させたという。その數年後、西南夷の反叛が絶えないこと、および匈奴對策のほうが緊急を要していたことなどから、公孫弘の進言に従って<sup>(39)</sup>

上、西夷を罷め、獨り南夷の夜郎に兩縣・一都尉を置き、稍く犍爲をして自ら葆就せしむ。<sup>(40)</sup>

ということになった。

この二文に關して久村氏は次のように解しておられる。西夷の地に置かれた「一都尉・十餘縣」すなわち都尉が異民族の居住する一〇餘縣を支配する體制は、西夷道工事の停止とともに廢止されたけれども、南夷に置かれた一都尉・數縣は、はやくから南夷道工事が進行していたために、その工事を停止しても全廢されたわけではなく、都尉が二縣を支配する程度として殘存し、その成就是犍爲郡の手に委ねられた、と。<sup>(41)</sup>

たしかに、西南夷地方におこなわれた都尉によるこのような異民族支配の實態は、久村氏の說かれる通りであったかもしれない。しかし鎌田氏もこれを「部都尉の初期の姿を示すごく感ぜられる」とのべておられるように、その支配形式からいつのちに部都尉制へ承けつがれていったことは疑いなく、その意味で非常に注目すべき政策であったと認められるのである。

そのため、右の傍線の部分を再検討してみたい。(イ)の「西夷の邛・笮」のうち邛の地には元鼎六年に越巂郡を置いてい<sup>(43)</sup>

るので、(四)の記述は笮の地についてのことであるといえる。したがってその「一都尉・十餘縣を置きて、蜀に屬」したというのは、沈黎郡開置以前の笮夷にたいする支配方式を示すものであろう。そして前引の南蠻西南夷列傳によれば、沈黎郡はそのご廢され、かわって蜀郡西部都尉が笮夷を管掌することになったのであるから、ここに都尉による支配から部都尉制への繼承關係をはっきり読みとれるのである。

そして問題の屬國はこの部都尉制が轉身していったものであるらしい。郡國志に載せられた後漢の屬國についてみると、廣漢屬國は故の北部都尉、蜀郡屬國は故の西部都尉、犍爲屬國は故の南部都尉であることがわかり、これを前掲表2と重ねてみれば一目瞭然であろう。これより、五屬國以外の前漢の屬國はそのほとんどが邊郡の部都尉から轉身したものと推定される。もしそうであれば、ここに

都尉が異民族の居住する諸縣を支配する體制→部都尉制→屬國制

という發展段階を認めることができる。この部都尉の開始を鎌田氏は、武帝の時代に求めておられる。<sup>(44)</sup> わたしはさらにこの發展段階そのものが武帝の對外進出の過程で順次形成されたものであり、それは屬國制の形成をもつて完成したと考える。

そしてこのようなシエーマにおいて五屬國のもつ意味を捉え直してみると、前漢の異民族支配のありかたは昆邪王の投降直前まではまだ部都尉制の段階であり、その投降を機に五屬國が設置されると屬國制へ切りかえられ、それと同時に異民族支配の中心も從來の典屬國から屬國都尉へ移っていったといえよう。<sup>(45)</sup> したがって、たしかに文帝時代すでに典屬國は置かれていたとしても、それはあくまで事務的な機關であり、武帝の五屬國設置以前にも屬國が前漢にあったと讀める百官表の記事や、高祖以來屬國はあったとする手塚氏の見解ははなはだ疑問に思われるのである。<sup>(46)</sup>

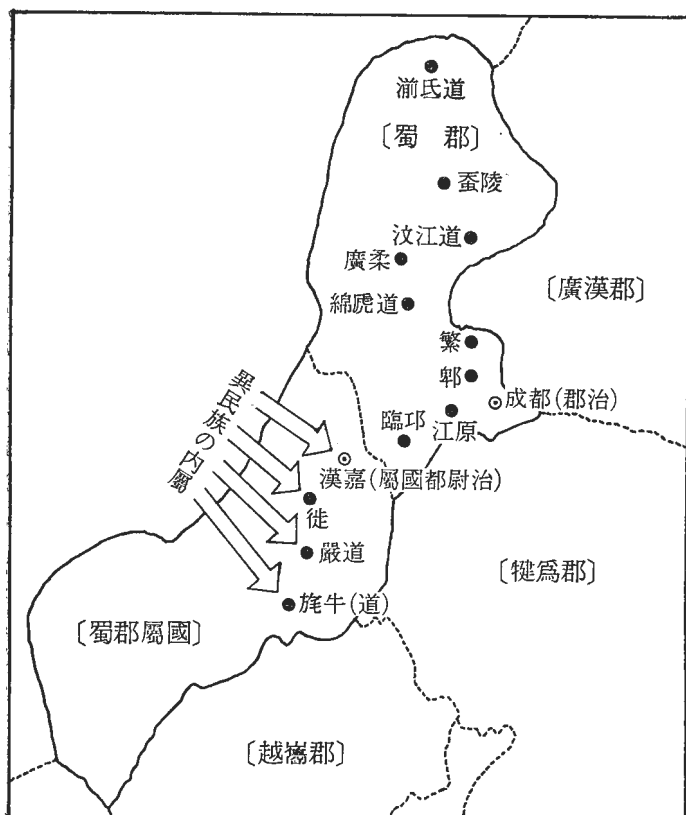
それでは、これら前漢の屬國は具體的にどのようなものであったかという点、せいぜい屬國都尉の治所が知られる程度で、<sup>(48)</sup> そのほかの詳しいことはほとんどわからない。したがって、さらに時代は下ってしまうが、その實體を後漢において

みてみることにしたい。

### 三 後漢にみられる屬國と道

圖1 屬國の形成

譚其驥主編『中國歷史地圖集』第二冊，秦・西漢・東漢時期（地圖出版社，1982年）をもとに作成。



遼東として龜茲屬國であり、このほかに嚴耕望氏は西河・酒泉・安定の三屬國をあげ、さらに藤田至善氏は金城屬國の存在をあげておられる。<sup>50</sup>

これらの屬國がどのようにして形成されたのかを説明しているのは、次の百官志の記事である。

其の屬國の都尉は、郡より分たれし離遠なる縣に之を置くこと郡の如くにして、差々小なるものなり。本郡の名を置く。……屬國ごとに都尉一人を置き、比二千石、丞一人あり。……又、屬國都尉を置き、蠻夷の降者を主らしむ。中興の建武六年、諸郡の都尉を省き、職を太守に并

せ、都試の役無く、關都尉を省き、唯々邊郡のみ往往にして都尉及び屬國都尉を置き、稍く縣を分ちて民を治めて郡に比すること有り。

これより、およそ次のようなことが知られる。すなわち、異民族が投降してくると、後漢政府はそれらを邊郡の諸縣に居住させたこと、やがてその諸縣を本郡から切り離し、それを屬國として再編し、そこへ屬國都尉を派遣して統治させたと、屬國の統治方式は郡に倣ったこと、そして屬國は本郡から分離したのもその本郡の名を残したこと、等々である。このような屬國の内容をかりに蜀郡屬國を例にとつて圖示すれば、前頁のようになるだろう（圖1）。

そしてこの蜀郡屬國の形成過程を具體的に示しているのが、次の『後漢書』南蠻西南夷列傳の文である。

和帝の永元十二年、旄牛の徼外の白狼、樓薄の蠻夷の王唐繪等、遂に種人十七萬口を率いて歸義内屬す。詔して金印紫綬を賜い、小豪の錢帛に各々差有り。安帝の永初元年、蜀郡の三襄種の夷、徼外の汙衍種と與に兵三千餘人を并せて反叛し、犛陵城を攻め、長吏を殺す。二年、青衣道夷の邑長の令田、徼外の三種の夷三十一萬口と與に、黄金・旄牛牂を贖し、土を擧げて内屬す。安帝、令田の爵號を増して奉通邑君と爲す。延光二年春、旄牛夷反叛し、零關を攻めて、長吏を殺し、益州刺史の張喬、西部都尉と與に撃ちて之を破る。是に於て分ちて蜀郡屬國都尉を置く。四縣を領すること太守の如し。桓帝の永壽二年、蜀郡夷反叛し、吏民を殺略す。……靈帝の時、蜀郡屬國を以て漢嘉郡と爲す。

これによると、すでに和帝のころから西南夷の内屬があり、また安帝のときに三襄種・汙衍種が反亂をおこすなど、蜀郡内では一連の西南夷の蠢動があった。そしてそれらと連動するようにして青衣道夷の邑長令田は、徼外の三種の夷三十一萬

表3 藩附の爵號と郡縣・諸侯王・列侯との對應表

郡	縣
諸侯王	列侯
四夷國王 率眾王 歸義侯 邑君 邑長	諸侯 率眾侯 歸義侯 邑君 邑長

口とともに内屬してきたのである。それにたいして安帝は令田の爵號を増して奉通邑君としている。この増爵の意味は百官志の藩附の條に

四夷の國王・率眾王・歸義侯・邑君・邑長に皆丞有り。郡縣に比せらる。

とあることによって明らかになる。ただし『後漢書』卷九〇鮮卑列傳に「率眾侯」という

爵稱もみえるので、これも加えると、後漢における藩附の爵號と國內の郡縣や諸侯王・列侯との對應關係は、前頁のようであったと思われる（表3）。これによると、呂君は呂長の上に位置づけられていると判断されるので、令田自身はおそらくそれ以前に部衆を率いて内屬し、そのため青衣道に呂長として封じられていたのに違いなく、そのご徴外の他の三種の夷を内屬させた功によって、その爵號がすぐ上の呂君へひきあげられたものと思われる。このように、内屬してきた異民族の君長に一定の爵號をあたえることは、前漢にもしばしばみられる現象である。これは要するにかれらを漢朝の爵制秩序のなかに組みこむ意圖にはかならず、ここに漢代における異民族政策のもう一つの特質を見出すことができる。

そのご蜀郡では旄牛夷の叛亂があり、益州刺史張喬は蜀郡西部都尉とともにこれを鎮壓して、改めて蜀郡屬國都尉を置き、これに蜀郡から分離した四つの邊縣を統治させることにした。これが蜀郡屬國の誕生である。このことに關して郡國志の蜀郡屬國の條所引の劉昭は

故、西部都尉に屬し、（安帝）延光元年、以て屬國都尉と爲し、四城を別領せしむ。

と記している。

ところで蜀郡屬國を構成する四縣とは、郡國志によると漢嘉・嚴道・徙・旄牛のことである。このうち漢嘉とは後漢の順帝陽嘉二年（一三三）に改名されて以後の縣名で、<sup>(51)</sup>それまでは青衣道であって、古くは戰國時代の青衣羌國のあったところらしい。<sup>(52)</sup>徙もがんらい西南夷の故地で、司馬相如の經略によって開かれた縣である。<sup>(53)</sup>旄牛もやはり旄牛道にも作り、<sup>(54)</sup>旄夷の故地と考えられる。このことから、四縣のうち三縣までが道とみなされ、また四縣とも異民族の居住地と深いかわりのあることがわかり、屬國設置の所以を裏附けている。

そのごの蜀郡屬國の動向については、桓帝の永壽二年（一五六）三月に西南夷の反叛した記録が一度みられるだけである。<sup>(55)</sup>杳として消息はつかめず、やがて靈帝末年に蜀郡屬國は漢嘉郡へ昇格されるのである。<sup>(56)</sup>

この屬國から邊郡への昇格は、さらにそのほかの屬國についても認められ、例えば張掖居延屬國は後漢末に西海郡に、<sup>(57)</sup>

前 漢		後 漢		三 國
廣漢郡	北部都尉(陰平道)	廣漢郡(陰平道)	陰平郡	...
蜀 郡	一都尉十餘縣 沈黎郡	蜀郡屬國(漢嘉(故青衣))	漢嘉郡	...
	西部都尉(旄牛)			...
	西部都尉(青衣)			...
犍爲郡		南部都尉 犍爲屬國(朱提)	朱提郡	...
張掖郡				...
居延都尉		張掖居延屬國(居延)	西海郡	...

表 4 屬國の變遷 ( ) 内は治所。

廣漢屬國は三國魏のとき陰平郡に、犍爲屬國は三國蜀のとき朱提郡にそれぞれ轉身している。おそらく後漢の屬國はその異民族支配がある程度成功すると、のちに邊郡へ昇格させる豫定になっていたのであろう。このような屬國から邊郡への變遷を前漢まで溯って表にしてみると、ほぼ次のようになるだろう(表4)。

これまで蜀郡屬國の形成過程を検討してきたわけであるが、そのけっか、表4にみられるように、蜀郡ではその異民族支配の部分が前漢において一都尉十餘縣→沈黎郡→蜀郡西部都尉へと發展し、後漢に入ってから蜀郡屬國→漢嘉郡へと展開していった過程をたどることができた。これは屬國形成における一つの典型であるが、他の屬國においてもほぼこれと同じような形成過程をたどったものと推定される。

先述のように、前漢の典屬國は秦制を承けたものであり、また秦代に屬邦・道も存在した。それでは秦代ではどうだったのであろうか。そこで更めて秦代の検討に入りたいと思う。

## 四 秦簡の屬邦と臣邦眞戎君長

秦簡の屬邦律は前引のごとくであるが、そのほかに屬邦とよく似たものとして臣邦の名が秦簡にみえる。そのため、まずこの臣邦の内容を検討することから始めてみたい。

臣邦は秦簡の「法律答問」において次のように現れている。

(1) 可(何)をか贖鬼薪盜足と謂うや。可(何)をか贖宮と謂うや。・臣邦眞戎君長にして爵上造以上に當り、罪有りて贖に當る者なり。其の羣盜を爲したるものは、贖鬼薪盜足し、其の府(腐)罪有るものは、【贖】宮せしむ。其の他の罪の羣盜に比せらるる者も亦、此の如くす。<sup>(60)</sup>

(2) 臣邦の人の、其の主長に安んぜずして夏を去らんと欲する者は、許す勿れ。可(何)をか夏と謂うや。秦屬を去るを是れ夏【を去る】と謂う。<sup>(61)</sup>

(3) 眞臣邦君公に罪有りて、耐罪以上に致るも、贖せしむ。可(何)をか眞と謂うや。臣邦の父母の産子、及び它邦に産れたるものを而ち是れ眞と謂う。・可(何)をか夏子と謂うや。・臣邦の父・秦母の謂<sup>(62)</sup>。

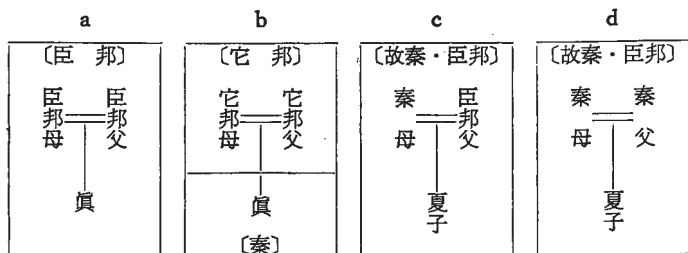
(4) 者(諸)侯・外臣邦に使いし、其の邦徒及び僞吏來らざるとも、坐する弗し。・可(何)をか邦徒・僞使(吏)と謂うや。徒も吏も與に僭<sup>(63)</sup>使いに<sup>(64)</sup>して私舍人と爲さず。是れを邦徒・僞使(吏)と謂う。

(5) 擅に其の後子を殺・刑・髡せば、之を濫す。・可(何)をか後子と謂うや。・其の男を官して爵後と爲し、及び臣邦君長の置きて後大(太)子と爲す所を、皆、後子と爲す。<sup>(64)</sup>

これらの臣邦の用例を整理してみると、①たんに臣邦とだけあるもの、②臣邦眞戎君長・眞臣邦君公などのように「眞」字のつくもの、③外臣邦というように「外」字のつくもの、の三つのタイプに分類できる。そして、それらのなかでとくに異民族と關聯のありそうなものは③の臣邦眞戎君長であると思われる。それはいったい何を意味する稱號なのであろう

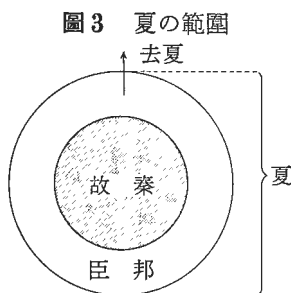


圖2 秦の身分形成圖



これを解明する重要な鍵は(3)の「眞」に関する問答である。それによると、「眞」とは第一に「臣邦の父母の産んだ子」であり、第二に「它邦に産れたもの」のことである。そして文中において臣邦は它邦と對比して表されていること、また它邦とは他國とも稱し、<sup>(65)</sup>他國とは自國にたいする他國のことであると考えられることから、臣邦とは他國にたいする自國(秦)側の領域を示す用語であると解される。しかし臣邦をそのまま秦の同義語と解することはできない。臣邦の「臣」は臣屬している状況を表していると考えられるからである。臣邦とは、その字義から推して「(秦に)臣屬している邦(國)」のこと、すなわち秦の一定の支配下にある國の意に解される。したがって「眞」の第一の定義は「秦に臣屬している國の父母から生れた者」となり、これを圖に表すと次のようになるだろう(圖2a)。また「眞」の第二の定義は、秦との支配関係にない他國の父母から生れた者、と一應いえるけれども、そのさい(3)の「法律答問」はとうぜんその人物が何らかの理由で秦に入り、かつ定住していることを前提としているはずであるから、それをさらに嚴密に定義づけると「父母とも他國人で、そのご秦に入り、かつ定住している者」ということになる。これを圖に表すと次のようになるだろう(圖2b)。

では、この「眞」とは具體的に何を意味しているのであろうか。これについて釋文注釋者は「純粹に少數民族の血統に屬していることを指す」と注し、于豪亮氏もそのように解しておられる。しかし、それでは臣邦も它邦もすべて異民族の國となってしまう、なぜ兩者が區別して記されているのか不明瞭になる。また秦に臣屬していたのは、何も異民族だけではない。



「眞」と規定されるケースのなかで、具體例をもって検討しやすいのは、その第二の定義（圖2b）に該当する人物であろう。その該当者は商鞅・李斯・呂不韋など枚舉に遑がないけれども、とくに李斯についてみてみると、かれは「逐客令」に反駁した上書のなかで自分たち他國出身の官吏のことをくりかえし「客」と稱している。また「逐客令」という表現じたい、かれらにたいする王室側の見方を端的に示しているともいえよう。このことは圖2bの該当者が秦國の社會のなかでいかなる身分状態にあったのかを示すものである。すなわち、かれらは秦にたいする貢獻度とはかわりなく「客」身分だったのであり、その法制的表現が「眞」であつたと解されるのである。<sup>(67)</sup>

この「眞」と對稱的な存在を「夏子」というらしい。同じく(3)の「法律答問」によると、「夏子」とは「臣邦の父・秦母の謂」である。この秦母とは臣邦の父にたいする稱謂であるから、故秦（固有の秦土）の母親のことであろう。その間に生れた者は「夏子」と規定されている。もっともそのさい、その父母・子供が臣邦と故秦のいづれに居住しているのかが問題となる。そこで(2)の「法律答問」をみてみると、臣邦の人で秦屬（秦への歸屬）を去ることを「去夏」と表現されている。これを圖に示すと右のようになるだろう（圖3）。「夏」とはもともと中原の諸國を指し、夷狄と對比して表される言葉であるが、これによると秦でも自ら「夏」をもって任じていた上に、その支配下にある臣邦までも「夏」の範疇に含めていたことがわかる。そうすると、故秦・臣邦のいづれに定住していようと、臣邦の父・秦母の間から生れた者は「夏子」と規定されたことになるだろう。これを圖に表すと前頁のようになるだろう（圖2c）。

これまでの結果を推し進めてゆけば、父母とも故秦人であればとうぜんその間に生れた者は「夏子」と規定されたはずである。「法律答問」ではそのことに關する言及はないけれども、それはあまりにも自明であつたから、ことさら論議の對象とはしなかつたのであらう。それゆえに「夏子」とは身分上完全な秦國人のことであると結論できる。

以上の「眞」・「夏子」に關する分析結果は、その論理的歸結として、秦の勢力圏内に居住している人物が「眞」・「夏」のいづれに屬するかは、一にその母親にかかっていることを示しているごとくである。

この分析結果にもとづいて、改めて臣邦眞戎君長の意味を検討してみると、この用語とよく似ている「眞臣邦君公」との關係が重要であるように思われる。そこで兩者を比較してみると、前者は

臣邦<sup>1</sup>・眞<sup>2</sup>・戎<sup>3</sup>・君長<sup>4</sup>

の四要素に、後者は

眞<sup>2</sup>・臣邦<sup>1</sup>・君公<sup>4</sup>

の三要素に分解できると思われる。すると兩者の最大の相違は「戎」<sup>3</sup>の要素の有無ということになる。したがって、この相違にもとづいて、前者の臣邦の君主は「君長」と稱され、後者の臣邦の君主は「君公」<sup>(69)</sup>と稱されるという區別が生じていると解される。

そして、前者の君長とは、戰國・秦漢の史料のなかでは異民族の君主の場合に用いられている。『史記』卷一一四東越列傳によると

閩越王無諸及び越の東海王搖なる者は、其の先は皆越王句踐の後なり。……秦已に天下を并せ、皆廢して君長と爲し、其の地を以て閩中郡と爲す。

とあり、ここではとくに秦では征服した異民族の王號を貶して君長として注目されていることが注目される。

このような検討をもとにして兩者の稱號の内容を譯出してみると、前者は

1 「秦に」臣屬している邦（國）において 2 「秦母に非ざる母親から生れた」 3 「異民族の」 4 「君長」

となり、後者は

1 「秦に」臣屬している邦（國）において 2 「秦母に非ざる兩親から生れた」 4 「（異民族に非ざる）君公」

となるだろう。これより、前者の臣邦とはまさしく屬邦のことであると解され、後者のそれは、秦の支配下に入ったのも宗廟・社稷の保持を認められた「附庸」に該当すると解されるのである。<sup>(70)</sup>

このように解することに太過なれば、秦は「眞」「夏子」の身分的差別をテコとして、とくに臣邦（屬邦）の異民族をどのようにとりこんでいったのかが、次の重要な問題となるだろう。そこで注目されるのは、(4)の「法律答問」にみえる外臣邦という存在である。この外臣邦について釋文注釋者は「秦に臣服している屬國」と注している。しかしこれでは臣邦（屬邦）との區別が定かでない。ただしこの注釋は秦漢の史料に散見する外臣を念頭においたものであることは、容易に推測される。

かつて栗原朋信氏はこの外臣とともに内臣等の概念にもとづいて漢帝國の秩序構造を論證された。<sup>(71)</sup>それによると、漢は帝國全體を中華思想によって内・外の區別をたてていた。すなわち内とは封建制と郡縣制の布かれていた地域で、そこでは内臣としての官僚・諸侯王・列侯はもとより、一般庶人に至るまで漢の禮・法を奉ずる分子である。これにたいして外とは、漢と直接關係をもった君主だけが漢の禮・法を奉じ、その支配下においてはその民族獨自の禮・法がおこなわれている地域の分子であり、これが外臣の國である。氏は、このような内・外の區別はすでに周代から始まるとされる。

ではそのような漢代の外臣の概念をもって秦簡の外臣邦は解釋しうるであろうか。

古賀登氏は(4)の「法律答問」に關して、「其の邦徒」とは「諸侯・外臣邦の邦君の黨與（一族・ともがら）」を指し、また「僞吏」の誤りであり、その「僞吏」とは「諸侯・外臣邦の官吏」すなわち秦側からみた「僞吏」のことであると解され、その上で全文を次のように譯しておられる。

諸侯・外臣邦に使し、其の邦君の邦徒・僞吏が來なくとも、（奉使無狀の）罪にはならない。・何を邦徒・僞吏と謂うのか。・邦徒（その封君の一族のもの）・僞吏（相手國の官吏）とも、みな正規の使者であつて、邦君の私の隨身人ではないものである。是を邦徒・僞吏と謂う。<sup>(72)</sup>

これによって難解であつた本文も意味が通るようになったといえる。さて文中において外臣邦は諸侯と併記されているので、外臣邦はある意味ではば諸侯と同レヴールのものであるといえよう。しかし外臣邦は「臣邦」の名がつく以上、あくまで臣邦の範疇に屬するというべきである。このような外臣邦の性格は漢初の南越の場合ときわめて酷似しているように思われる。

すなわち南越と漢との關係は高祖以來紆餘曲折があつたけれども、文帝のとき陸賈の遣使によって懷柔に成功する。そのこの南越について『史記』卷一一三南越列傳に

遂に孝景の時に至るまで、臣と稱し、人をして朝請せしむ。然れども南越は其の國に居るや、竊かに故の號名の如くし、其の天子に使いするや、王と稱し、朝命は諸侯の如し。

とあり、これによると南越は稱臣して毎年遣使朝請し、それにたいする漢朝の待遇は「諸侯の如く」であつた。この時期の南越は、栗原氏によればまさに外臣なのである。<sup>(73)</sup>したがって秦簡に見える外臣邦は漢代の外臣の地域(國)に比定して誤りないと思われる。

では、その外臣邦との比較において臣邦(屬邦)はどのように位置づけることができるのであろうか。その指標は、外臣の君長自身には秦の禮・法がおよぶのにたいして、臣邦(屬邦)についてはどうであつたかということであらう。この問題については『後漢書』南蠻西南夷列傳に次のような興味深い文がみえる。

秦の惠王の巴中を并すに及び、巴氏を以て蠻夷の君長と爲し、世々秦女を尙<sup>あわ</sup>せ、其の民の爵を不更に比し、罪有らば爵を以て除かるることを得しむ。其の君長は歲ごとに賦二千一十六錢を出し、三歲に一たび義賦千八百錢を出す。其の民は戸ごとに幃布八丈二尺・雞羽三十鉞を出す。漢興りて、南郡太守靳彊、一に秦時の故事に依らんことを請う。すなわち、戰國秦の惠文王が巴中を平定したとき、巴氏(巴王)<sup>(74)</sup>を貶して君長とするとともに「其の民の爵を不更に比」したという。この「其民爵比不更」について劉放は、巴の民が爵を有したはずはなく、爵のことは巴氏の君に關するもの

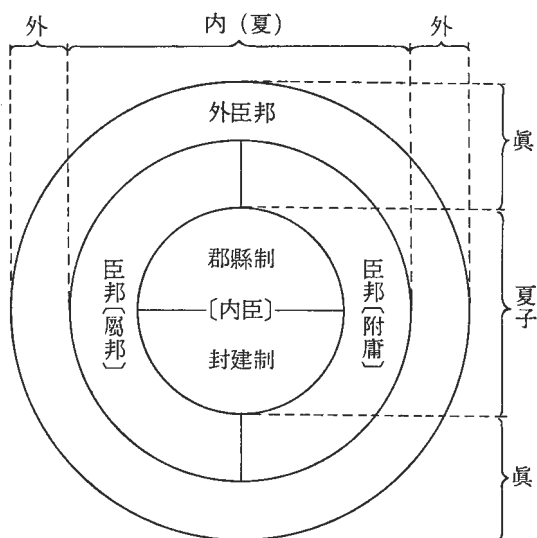


圖4 内臣・臣邦・外臣邦の構造

であり、「民」字は衍文であるとする。これにたいして柳從辰<sup>(76)</sup>は、秦爵第四級の不更は「更卒の事に豫らざる」をもって命名されたものであるから、右の文は、新附した巴氏を懷柔するためにその君長には「世々秦女を尙せ」、その民にたいしては「更卒に豫らずして但々常賦を出すことを得」しめたものと解する。

しかし劉・柳説にはそれぞれ次のような問題がある。まず第一に、構文の上から右の一文は柳從辰のように、君長の場合とその民の場合とに分けて讀むべきであると思われ、したがって劉敞の説は採れない。それでは柳從辰の解釋をそのまま採用できるかという点、不更についての解釋に問題がある。西嶋定生氏は不更の原義を更卒に關聯づけて解釋している劉劭や顏師古の説にたいして、不更の名はすでに『左傳』成公一三年の條に<sup>(77)</sup>。

みえるので、春秋時代に更卒の制度があつたのでないかぎり、劉・顏説には従えないと指摘しておられるからである。  
これらの劉・柳の二説は、要するに巴の民に秦爵が賜與されたはずはないという前提にもとづいている。しかし、巴の民に秦二十等爵そのものが賜爵されたのではないかもしれないけれども、右の文はあくまで「爵を不更に比し」と記している以上、賜爵に準じたことがおこなわれたとみなさなければならぬ。それを傍證しているのはその後文に「罪有らば爵を以て除かることを得しむ」とあることである。すなわち有爵者には爵の本質的機能としての刑罰減免の特権があったからである。したがって「其の民の爵を不更に比し」というのは、巴の民に「罪有」る事態の發生を豫想してのこ

とであろうから、これを裏がえせば、巴の民にたいしても秦法はおよんだといわざるをえないのである。ただしその滲透度については「不更に比」すという表現からみて、限定的なものであったことが推定される。

この南蠻西南夷列傳より、およそ次のことが知られるであろう。巴を征服した戰國秦は①巴王を貶して君長とし、②君長とその率いる巴の民を秦の爵制秩序に組みこみ、③その民に至るまで一定の法制支配をおよぼした。

これをこれまで検討してきた臣邦（屬邦）の内容と比較してみると、①については臣邦（屬邦）の君主も君長と表されており、②については①の「法律答問」に「臣邦眞戎君長にして爵上造以上に當り、罪有りて贖に當る者なり」とあるように、少なくとも君長にたいしてはその爵級に應じた贖罪がおこなわれている點で共通している。また臣邦（屬邦）の大部分は征服した異民族の居住地帯に設置されたものであろうから、巴人の故地においても臣邦（屬邦）が置かれたと推定される。してみると、右の南蠻西南夷列傳の文は臣邦（屬邦）の實態の一端を示しているものと認められるのである。そしてこのことから、わたしは臣邦（屬邦）内の「眞」身分の者にたいしても、一定の法制支配がおよぶものと推定する。<sup>(78)</sup>

その意味では、君長だけに禮・法のおよぶ外臣邦より、臣邦（屬邦）はいちだんと秦の支配體制に組み入れられているといえよう。したがって、臣邦（屬邦）は秦の支配體制のなかで内臣と外臣のちょうど中間に位置づけられると思われる。<sup>(79)</sup>この臣邦（屬邦）と外臣邦との區別は地理的要素に起因すると考えられる。すなわち、秦と隣接している異民族居住地帯は、秦はそこを征服すると郡制を布いているけれども、その内部においては臣邦（屬邦）を置き、その構成單位が道であったと思われる、その外延にある異民族の君主が使を遣わして臣屬してきた場合には、その地の實質的支配は困難であったから、その君主に冊封して外臣とし、その國を外臣邦といっていると解されるのである。これを圖に表すと前頁のようになるだろう（圖4）。

## むすび

これまで漢代における屬國の形成過程を手がかりとして秦代の異民族支配の構造を検討してきた。それをまとめてみると次のようになるだろう。

(一) 秦は鄰接している異民族の居住地帯を征服すると、そこに郡を開置しているが、その内部に臣邦(屬邦)が設置され、その構成單位が道であったと思われる。

(二) 臣邦(屬邦)の人民は、その君長はもとよりかれらもまた秦の爵制秩序に組み入れられ、一定の法制的支配をうけたとと思われる。

(三) この臣邦(屬邦)の人民が「秦化」してゆく上で重要な役割を果たしたと思われるのは、「眞」・「夏子」の差別にもとづく身分制の原理であった。

(四) 秦は征服地の人民を「眞」(客身分)と規定し、かれらが「夏子」(身分上完全な秦國人)となるためには、少なくとも秦母(夏子身分の母親)より生れるしかなかった。このことが臣邦(屬邦)の異民族の「秦化」<sup>(80)</sup>を促進したと思われる。

以上の結論から、さらに次のことが今後の問題となるであろう。

まず第一に、前引の南蠻西南夷列傳において、巴を征服した恵文王はその君長に公主を降嫁して優待したとあるが、これまでの分析結果によればこの公主の降嫁によって巴はその支配層の中樞から代々「夏子」を生みだすことになったと解され、ここに公主降嫁のもつ新しい意義を見出すことができると思われるのである。

次に、それとは正反對に、例えば昭襄王や始皇帝の母のように他國出身者の母と秦父の間に生れた者の身分はどうなるのかという問題がある。<sup>(81)</sup>少なくとも秦王と「它邦母」から生れた昭襄王らは「夏子」であったと推定されるけれども、「法律答問」にはそのことは言及されていない。一般秦人の場合については基本的に想定されていないと解すべきなのだろう



か。

さいごに、圖4に概念化したように、秦の征服地である臣邦は屬邦と附庸にわけられ、その地の人民はともに「眞」身分であった。つまりそこには華夷の別はないのである。そしてそのような秦の附庸としては、二世皇帝の元年まで存続した衛が典型なのであるが、このような秦との支配関係は、他の中原諸國の征服過程においても存在しえたのではないかと推定されるのである。ただし、この六國との關係については飯島和俊氏が研究をすすめておられるので、<sup>(82)</sup>その成果にまちたいと思う。

# 註

- (1) 工藤元男「秦の内史——主として睡虎地秦墓竹簡による——」『史學雜誌』第九〇編第三號、一九八一年。
- (2) 工藤元男「戰國秦の都官——主として睡虎地秦墓竹簡による——」『東方學』第六三輯、一九八二年。
- (3) 『左傳』文公三年、『史記』卷四秦本紀・繆公三十七年の各條。
- (4) 以下に引用する秦簡のテキストを便宜上次のように假稱する。  
(イ) 七七年版(睡虎地秦墓竹簡整理小組「睡虎地秦墓竹簡」線裝七冊、第一・二冊圖版、第三・七冊釋文・注釋、一九七七年九月)。  
(ロ) 七八年版(睡虎地秦墓竹簡整理小組「睡虎地秦墓竹簡」洋平裝、三二二頁、釋文・注釋・譯、一九七八年一月)。  
(ハ) 八一年版(《雲夢睡虎地秦墓》編寫組「雲夢睡虎地秦墓」洋精裝、一・一四六頁發掘報告等、圖版一・四九器物の寫眞、圖版五〇・一六八釋文附き、一九八一年九月)。いづれも文物出版社の發行である。以下、文中で釋文・注釋・譯に言及する場合、とくにことわりのない限り(イ)の七八年版を示している。
- (5) 七七年版「秦律十八種」(二〇二)、七八年版(二〇)一一一頁、八一年版(二六八)。(ハ)内は各文書番號。古賀登「漢長安城と阡陌・縣鄉亭里制度」(雄山閣、一九八〇年)四八九頁。
- (6) 李仲操「八年呂不韋考」(『文物』一九七九年第二期)。
- (7) 王先謙「漢書補注」所引の王念孫は、皇太后の三字を後人の意をもつて加えたものとしている。
- (8) 孫星衍輯本「漢官六種」(平津館叢書、四部備要所收)。
- (9) 「三邊始孝武皇帝所開、縣戶數百而或爲令」とある。
- (10) 『水經注』卷三六沔水條。
- (11) 『通典』卷三三職官一五縣令條。
- (12) 『太平寰宇記』卷七四・劍南西道三・嘉州・龍遊縣條。
- (13) 『通鑑』卷六秦紀一・始皇帝三年條の注。
- (14) 『續漢書』百官志五・縣鄉條。
- (15) 『中國地方行政制度史』上編卷上、秦漢地方行政制度(臺

北、一九六一年、七頁。

(16) 『秦の『道』について』(『中國古代史研究』吉川弘文館、一九六〇年、所收)。

(17) 青衣道(『後漢書』卷五安帝紀、同卷八六南蠻西南夷列傳)、縣虜道(郡國志、『水經注』卷三六)、旄牛道(『水經注』卷三六)、汶江道(郡國志、『水經注』卷三六)、武都道(『漢書』卷三高后紀、郡國志)。

(18) 七七年版「南郡守騰文書」(一)、七八年版一五頁、八一年版(〇五四)。

(19) 「秦道考」(『文史』第九輯、中華書局、北京、一九八〇年)。

(20) 同氏譯『漢書』中卷、列傳一、五〇四頁の注(6)(筑摩書房、一九七八年)。

(21) 百官表は前引の如くこの年を元狩三年としているが『漢書補注』所引の周壽昌はこれを二年の誤りとし、後で引く『漢書』卷六武帝紀では元狩二年と記され、荀悅『前漢紀』・『通鑑』も二年としている。これに對し施之勉氏は三年説を主張しておられる(「元狩三年箇屬國都尉」『大陸雜誌』一一一三、同氏著『漢書補注辨證』新亞研究所、九龍、一九六一年、八八頁)。後考に待ちたい。

(22) 『漢書』卷五四李廣傳。

(23) 『漢書』卷七昭帝紀、同卷八宣帝紀、同卷五四蘇武傳、同卷八霍光傳。

(24) 『漢書』卷一八外戚恩澤侯表。但し原文に陽姓に作るのは誤りである(『漢書補注』所引「官本考證」及び中華書局版標

點本『漢書』三、表(二)、七二〇頁の校勘記參照)。

(25) 『漢書』卷七〇常惠傳、同卷七九馮奉世傳。

(26) 『漢書』馮奉世傳。

(27) 『漢書補注』所引の齊召南のあげる『通典』。

(28) 『西漢會要』卷三一職官一典屬國條。

(29) 『通鑑』卷一九漢紀一一武帝元狩二年條の胡注及び胡三省所引の『史記正義』。

(30) 『漢書補注』所引。

(31) 「前漢の投降胡騎に就いて」(『蒙古』五月號、一九三九年)。

(32) 『秦漢政治制度の研究』(日本學術振興會、一九六二年)の第七章、屬國都尉。

(33) 久村因「史記西南夷列傳集解稿(一)」(名古屋大學教養部『紀要』第一四輯、一九七〇年)。

(34) 池内宏「樂浪郡考」(同氏著『滿鮮史研究』上世編、まき會 祖國社、一九五一年、所收)。

(35) 前掲書、一六七〜一七一頁。

(36) 地理志によると、前漢時代に開置された邊郡は、高祖のときの定襄・廣漢、武帝のときの犂靬・朔方・西河・安定・天水・越巂・武都・牂柯・日南・九眞・交趾・合浦・鬱林・蒼梧・南海・益州・樂浪・玄菟・張掖・酒泉・武威・敦煌、昭帝のときの金城、合計二五郡である。

(37) 前掲書、三一八〜三一九頁。また市川任三「前漢邊郡都尉考」(立正大學教養部『紀要』第二號、一九六八年)を參照。

(38) 久村氏の讀み方に従う(同氏「史記西南夷列傳集解稿(一)」名古屋大學教養部『紀要』第一六輯、一九七二年)。

- (39) その間の事情について、ここに引用した二つの西南夷列傳の間に「當是時、巴・蜀四郡、通西南夷道、戍轉相饒、數歲道不通、士罷餓離濕、死者甚衆、西南夷又數反、發兵興擊、耗費無功、……是時方築朔方、以據河逐胡」という文がみえる。
- (40) 久村氏の讀み方に従う(註(38)に同じ)。
- (41) 註(38)に同じ。
- (42) 前掲書、三二二頁。
- (43) この年代の比定に關しては久村「史記西南夷列傳集解稿(四)(名古屋大學教養部『紀要』第一八輯、一九七四年)参照。
- (44) 前掲書、三二二頁。
- (45) この間の屬國都尉の統屬關係について、鎌田氏(前掲書、三三三頁)及び BELENSTEIN, H. は、河平元年までは典屬國に從屬し、それ以降は典屬國の職掌を併合した大鴻臚に從屬したであろうと推定してせられ(*The bureaucracy of Han times*, Cambridge University Press 1980, pp. 40-84, 109)。  
これに對して嚴耕望氏は、河平元年以降は郡守に從屬したと疑つておられる(前掲書、一五八頁)。また市川氏は本來當該郡の太守の線下にあり、典屬國とは名儀的な關係しかなかったとされる(前掲論文)。
- (46) 百官表に「復增屬國」とあるのは班昭自身の大勢からの解釋であると思われる。市川氏も武帝以下の二一字を「無理に挿入したように受取れる」とされる(前掲論文)。
- (47) 前掲論文。
- (48) 地理志によると、安定屬國は三水、天水屬國は勇士(滿福)、上郡屬國は龜茲、西河屬國は美稜、五原屬國は蒲澤に治す。
- (49) 前掲書、一六四～一六五頁。
- (50) 『後漢書語彙集成中』(京都大學人文科學研究所、一九六一年)。
- (51) 郡國志五蜀郡屬國條。
- (52) 『水經注』卷三六表衣水條。
- (53) 久村、前掲論文(註(33))。
- (54) 註(17)を參照されたい。施牛に、三國時代においてもそのような異民族が居住していたことは「民夷戀慕、扶藪泣涕、過施牛夷、邑君懷負來迎、及追尋至蜀郡界、其督相率隨疑朝貢者百餘人」とある如くである(『三國志』蜀書一三張疑傳)。
- (55) 『後漢書』卷七桓帝紀の同年條に「蜀郡屬國夷叛」とみえる。
- (56) 蜀郡屬國の名が最後にみえるのは『後漢書』卷八二方術傳下及び『三國志』蜀書一劉二牧傳の裴注所引の陳壽『益部耆舊傳』の董扶についてであり、彼が蜀郡屬國都尉を辭してまもなく漢嘉郡が置かれたらしい。その屬縣を『晉書郡注』卷一四地理志(下)海郡條に徴してみると、漢嘉・徙陽・嚴道・施牛であるらしい。
- (57) 『晉書郡注』地理志(下)海郡條。
- (58) 同右、陰平郡條。
- (59) 同右、朱提郡條。
- (60) 七七年版「法律答問」(一一三～一一四)、七四年版二〇〇頁、八一年版(四八三～四八四)、古賀前掲書三六七・四九〇頁。
- (61) 七七年版「法律答問」(一七六)、七八年版二六～二七七頁。

頁、八一年版(五四六)、古賀前掲書四三二頁。【】は古賀氏によって補った。

(62) 七七年版「法律答問」(一七七～一七八)、七八年版二二七頁、八一年版(五四七～五四八)、古賀前掲書四八八頁。

(63) 七七年版「法律答問」(一八〇)、七八年版二九頁、八一年版(五五〇)、古賀前掲書三四〇・四八九～四九一頁。

(64) 七七年版「法律答問」(七二)、七八年版一八二頁、八一年版(四四二)、古賀前掲書三七二頁。

(65) 它邦はこの他の「法律答問」(七七年版二〇四、七八年版二四〇頁、八一年版五七四)にも「可(何)謂(何)面」。「面」者、籍(籍)秦人使、它邦耐吏・行廢與偕者、命客吏曰「匿」、行廢曰「面」とみえ、釋文注釋者はこの它邦をやはり「他國」と譯している。

(66) 「秦王朝關於少數民族的法律及其歷史作用」(中華書局編集部編『雲夢秦簡研究』中華書局、北京、一九八一年、所收)。

(67) この「眞」の法制的概念は、そのいかなる語源から派生するのかが問題となる。『莊子』外篇秋水に「謹守而勿失、是謂反其眞」とあり、その郭象の注に「眞在性分之内」とあるのは注意を要する。これによると、「うまれ」→「うまれつき」→「天性」という意味變化を想定できる、従つて眞は「生まれ」という語義に源を發するものか。

(68) 『公羊傳』成公一五年條に「内其國而外諸夏、内諸夏而外夷狄」とある。于豪亮前掲論文参照。

(69) 『尚書』商書・説命中に「樹后王君公」とあり、『墨子』卷三尚同中に「乃作后王君公」とあるように、君公とは諸侯の意

である。

(70) 註(69)の君公の意味もこれを傍證する。

(71) 『秦漢史の研究』(吉川弘文館、一九六〇年)、「漢帝國と周邊諸民族」(同氏著『上代日本對外關係の研究』吉川弘文館、一九七八年、所收)。

(72) 前掲書、註(63)を参照されたい。

(73) 前掲『秦漢史の研究』二四三～二四八頁。

(74) 『華陽國志』卷一巴郡に「及七國稱王巴亦稱王」とある。

(75) 王先謙『後漢書集解』所引。

(76) 同右書卷八六校補所引。

(77) 『中國古代帝國の形成と構造——二十等爵制の研究——』

(東京大學出版會、一九六一年、七四頁)。

(78) 古賀氏も「これらの臣邦はいうまでもなく秦屬であり、君長以下秦法によつて律せられた」とのべておられる(前掲書四九〇頁)。

(79) 以前、私はこのような臣邦を内客臣と考えていたが、今は保留する。

(80) 関瀬收芳「雲夢睡虎地秦墓被葬者の出自について」(『東洋史研究』第四一巻第二號、一九八二年)。

(81) 昭襄王の母は楚人で姓は卮氏(秦本紀)、始皇帝の母は趙の豪家の女である(『史記』卷八五呂不韋列傳)。

(82) 附記に示したシヤーンにおける氏の研究發表(The polity of China for non-Chin people in the age of Chan-kuo)にもとづく。

[附記] 小論は一九八三年九月三日、東京の榊堂會館で行われた

第三回國際アジア・北アフリカ人文科學會議のセミナーA3  
 「甲骨・金文ならびに簡牘研究」で発表した(In Connection  
 with the Law of the Dependent States 屬邦律 on a Bamboo  
 from the Ch'in in Tomb in Shui-hu-ti 睡虎地秦墓竹簡)を  
 もとに加筆補正したものである。

a character of financial organizations managed by bureaucracy.

Then the organization of *fu* became the office where the palacial life of the ruler was administered, as much as it furnished the place where ritual bronze vessels were cast. Moreover it had some function in the process of tax collection. The organization of *ku* was not only the official arsenal, but as a workshop for arms became the basic unit for military production on grand scale.

Most of these *fu* and *ku* were found in the military cities in the states of Han 韓, Wei 魏, Zhao 趙, and Qin 秦. This underlines the fact that in the Warring States period cities were military centers, equipped with all the commodities, arms, and provisions necessary to endure a long-term siege. Moreover, the institutions of *fu* and *ku* of Warring States period can be appreciated as forerunners of the imperial finance and state finance of Han period.

## THE VASSAL STATE REGULATIONS AS SEEN IN THE BAMBOO SLIPS OF THE QIN TOMB IN SHUIHUDI 睡虎地

KUDO Motoo

In the Warring States period, the State of Qin had to integrate a great many other tribes in the process of unification of the country. How was this accomplished? For the first time, this question can now be examined in the light of newly unearthed bamboo slips in the Qin tomb at Shuihudi 睡虎地. The conclusion of my examination are as follows:

The ruling system of the Qin was organized in three levels: around a kernel area of inner ministers there were the territories of the vassals, around which the territories of the outer retainers were established. The area of the inner ministers was the dominion of the Qin themselves, here, whether ruled according to the administrative or feudal system, all the people were deeply involved with the rites and laws of Qin. The territories of the vassals were either those of other tribes who had sworn allegiance to the Qin or those of different states, also allies, but with the permission to keep up their own ancestral shrines. On this level generally the ruler would be a scrupulous follower of Qin rites and laws,

and accordingly would pass these on to his people. On the other hand, the rites and laws of Qin were usually limited to the person of the ruler in the territories of the outer retainers.

The acceptance of Qin regulations by other tribes among the vassals was greatly enhanced by a twofold status system: there was the status of *zhen* 眞, i. e., guest, on the one hand, and the status of *xiazi* 夏子, native Qin man, on the other. All vassals,—allied states, and retainers—were defined as *zhen*. In order to become a *xiazi*, native Qin man, one had to be born by a native Qin mother. This regulation helped to accelerate the process of integration of other tribes into the Qin state.

## THE FAMILY ORGANIZATION AND ECONOMICAL CHANGES IN THE HAN PERIOD

INABA Ichiro

As regards the family organization in the Han period, there are two basic viewpoints of seeing it as a small family composed of lineral relatives versus seeing it as a complex, large family composed of collateral relatives. However, this polarization has arisen from a view of the Han period family structure as very static and inflexible.

Actually a great change took place in the family organization around the time of Emperor Wu of Han 漢武帝. Before his time a small family was dominant, later, however, a complex, large family was typical. This change, on one hand, was related to the prospering and decline of the monetary economy in this era, on the other hand, had something to do with a shift from Legalist regime to Confucian regime. When the monetary economy flourished, divergent trends towards smaller families could be observed. With the decline of the monetary economy a rationalization of life became necessary and a joint living situation was sought after.

From the latter half of the Western Han to the Eastern Han dynasty, there was moreover an increased impact of Confucian morality which was aimed at a complex family organization, where people lived together. Thus this type of family structure was then preferred by a wide range of social strata, who joined their lives and their property. Seen from a